

2020年度

事業報告書

特定非営利活動法人 かぶかぶ山のようちえん

1 事業の成果

1) 親子自然体験事業

① 受益者人数

活動回数	125回	(前年度102回)
延べ参加者数	2326名	(前年度2172名)
今年度新規体験家族数	34家族72名	
今年度年会員登録者家族数	59家族148名	

コロナの緊急事態宣言で活動休止期間が2か月間あったが前年度を上回る受益者数となった。土曜日開催のクラスを設けたことで、平日共働き家族が3人以上で参加する方が増加。23区など遠方からの参加も多い。また、乳児クラスでは2月に春の復職前に参加してみたいという方が地域や知り合い方の口コミで7組新規参加。

② 感染症対策および対応

4-5月は野外活動を停止した。コロナ禍で野外活動自粛は、緊急事態宣言直前4/5より、東京近隣の自然体験や森のようちえん団体の告知を見て判断した。

停止期間においてはオンラインかぶかぶへのプログラム変更を実施。

4月はお試し通信コースとして野外活動の代替としてLINEでのコミュニケーションを通したおうちの活動のテストを行った(毎日遊びのお題出しやオンラインでの会などのガイド、郵送であそびBOXと一緒に取り組むなど)。参加者より好評のため、有料に移行。

5月は通信コースとして2000円/月で実施。お題+スペシャルコーチの日(染め物・アート)+あそびBOX送付などの取り組みを行った。24組が参加 静岡・新潟など遠隔でも参加者があった。

6月の野外活動再開時は感染防止ガイドラインを他の団体等を参考に作成し、その後の運営についてもスムーズに対応できた。

③ 重大事故発生および対応

3月23日に参加者転落による重大事故発生(救急車による病院搬送/結果としては頭部打撲でその後問題なし)。原因は、スタッフ体制の不足、安全管理マニュアルの不徹底。体制を見直し、活動3名のスタッフ体制、スタッフの役割分担の見直し、参加者との情報共有について改善し活動を再開している。

④ 年齢別クラス制・担任制の導入と結果

2019年度まで異年齢で参加日も自由な制度だったが、年齢ごとに集まるほうが、参加者さん同士・スタッフと参加者さんとのつながりや年齢に応じた活動支援の質が向上するのではないかと想定の下、年齢別クラス制・担任制の導入をした。火曜/2-3歳(担任井上)、水曜/3-6歳(担任小川右写真)、金曜/0-1歳(担任岡田)、土曜/異年齢混合(担任小川)とした。

結果として、

- 同じ活動場所でも、クラスによって流れの予測や、関わり方を考慮して、同年齢同士の子どもの繋がりや、近い月齢のこどもを持つ親同士の交流の機会を設けることができた。2-3歳クラスでは年度後半、人数が増えるにつれ群れでの遊びが生まれて友だち関係も築かれた。0-1歳クラスではのわらべうた、のわらべうたベビーマッサージ、トークタイムなど、ゆったりと楽しむ時間を取ることができ、近い月齢のこどもを持つ親参加者同士の交流も盛んになった。3-6歳クラスでは山登りなど活動量の多いプログラムも実施でき、遊びこむことができた。
- 体験参加時も担任がきめ細やかにサポートしてくれたことで体験参加34組に対して24組と、70%以上にゆうえん(年会員に登録、2回以上参加)となった。
- クラスが定期的に顔を合わせたり、クラス毎のLINEグループの活用をする小グループとなったことでより深く繋がり合うきっかけとなった。(異年齢が参加する土曜日のクラスも含む)
- 兄弟姉妹がいる場合、月齢に応じて複数のクラスに参加してもらうことができたことで、それぞれの子を主



イ

役として向き合う時間をとってもらうことができた。

- 担任が一年を通して、親子の様子を見守り、気になる様子があった時には個別で保護者と連絡を取りながら気持ちを汲み取ることで寄り添いを行うことができた。
- 運営としても、活動場所の安全配慮面や連絡事項など、クラス横断で共通するところは共有し合い、業務の効率化につながった、
- 一方で、⑤に記載したような異年齢交流の場は設けたが全体的な参加率としては15%程度と低く、結果前年度に比較すると異年齢の交流が生まれにくかったと言える。
- 兼業や家庭の事情があるスタッフが多いため、担任制度はスタッフの負担がかなり大きくなってしまっても明確になった。
- 参加したい曜日が予定があって参加できない、毎週は難しいなど利便性についての声もしばしば受けた。
- 双子やきょうだいのいる家族に対してスタッフがサポートすることが多くなり、安全面で全体を見る体制ではサポートとの兼ね合いが難しいと感じる場面が多かった。

以上より、年齢に応じた活動支援の質は向上したが、スタッフ負担も大きく参加者さんの利便性低下も見られたため、担任制で良かった要素を残しながら、異年齢クラスに戻していくこととした(詳細は次年度事業計画参照)

⑤年会員コミュニティ運営

・クラス制を実施することから、異年齢の交流の場として、クラス横断で居心地のいい居場所を探せる仕組みも合わせて設定した。むら(延べ100名程度)、はたけのひろば(延べ20名)、キャンプ(60名、右写真)などを試行した。活動外の交流の場として参加者には好評であったが、年会員全体(60家族)の中の参加割合としては15%程度。平日開催のひろばやむらは、土日休みでの土曜クラスのメンバーなどは参加しづらい、キャンプはハードルが高いなどの要因がある。2021年度は助成で資金も得て、夜カフェなどオンラインで夜開催や、柵作りワークショップなどの土日開催で日帰り参加可能な場なども設けながら、発展させていく。



2) 青梅さとやま産後ケア事業

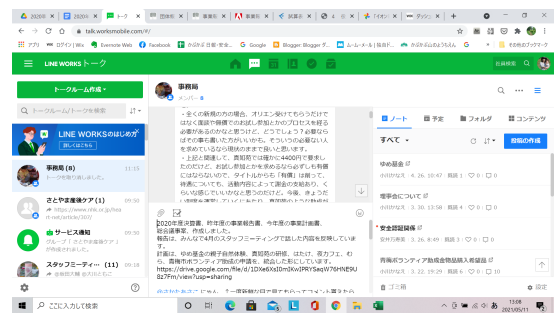
2020年度開始を目標として、青梅市での健康な妊産婦に向けた産後ケアの必要性を感じたため検討、2020年度青梅市民協働事業への提案を行うことを検討したが、コロナ禍で一旦取りやめとした。2021年度はスタッフ体制が不十分なため、2022年度以降検討していく。

3) 団体運営

①スタッフ・理事の体制に課題。

担任制のもとで業務負担の偏りがあったため、業務整理、業務ツールと制度等の変更を実施。

- 業務アプリとしてラインワークスの導入(右図)
- 親子自然体験活動については安全管理マニュアルに業務を一覧化
- スタッフ間の連携の為に1on1やスタッフケアグループ運営(個別面談、業務以外も含めた気持ちやタスクを書くトークグループ作成)
- スタッフとしての契約形態を指導協力に関しては雇用から業務委託へ変更、事務局作業については有償ボランティア制度に変更
- 次年度および中期計画を考えるみらい会議を7-9月に複数回開催。
- 自然体験や地域活動の専門家が不在のため、理事・監事に知見のある方を検討し依頼



2021年度は更に体制変更や新しい理事監事参画があるので整備を進めていく。

②財政基盤強化

- ・コロナの各種給付金により資金増。
- ・参加費 2021年度に向け2月にスタッフ体制の再周知ときょうだいの参加費を値上げ。そつえんする人も出たが概ね理解を得られた。
- ・サポーター制度(寄付しやすい仕組み)について着手。ふたごきょうだいサポーターについて資金源として真如苑多摩地域市民活動助成プログラムに応募し採用された。

③ 広報

ウェブページを整えSEO対策をたことで
サイト訪問者は2019年度と比べて増加。
体験にもウェブ検索からの流入増。遠方
からの来訪者はほぼウェブ流入。また④
に示す地域内連携での体験参加も年度
後半増加。引き続き遠方はウェブ、近距
離は地域連携を中心として、

広報活動に力を入れていく。(写真は2019/4~2021/3のホームページ流入者数とアクセス数の変遷)



④ 地域との連携

2020年4月に「青梅こども関連NPO協議会」がNPO法人青梅こども未来の
声掛けにより発足。発足時の他3団体(未来・子ども劇場西多摩、どんぐり
山)とともに主要メンバーになり、2021年度は副会長となる。広報誌の発行
や、青梅こどもふれあいフェスタの運営など、地域でのこどもの居場所、健
全育成に寄与する事業に共に取り組んでいくこととなった。(写真は団体
交流会のパネルセッションの様子)



2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

(事業費の総費用【5,390】千円)

定款に記載された事業名	事業内容	日時	場所	従事者人数	受益対象者範囲	受益対象者人数	事業費(千円)
親子自然体験事業	親子自然体験活動 -かえる(未就園/火) -かもしか(幼児/水) -むささび(異年齢混合/土) (3クラス計90回) -おたまじゃくし組(乳児/金) (計20回) -コミュニティ活動 4,5月 オンライン(毎日) 6~3月 むら(計10回) 9月 むらキャンプ(1回) 1~3月 はたけのおしゃべり ひろば(計4回)	2020年 4月~ 2021年 3月	青梅市の 自然公園 および私 有地	7	未就学児 親子	2,326	5,390